

国際的な支援からの自立に向けて「具体的に何ができる？」

【実践者】

氏名	山端 研人	学校名	青森県八戸市立市川中学校
担当教科等	社会科	対象学年（人数）	1年1組（29名）
実践年月日もしくは期間（時数）	令和5年11月23日（木）～11月30日（木）（計5時間）		

【実践概要】

1. 単元（活動）名 地理的分野 アフリカ州－国際的な支援からの自立に向けて－「具体的に何ができる？」		
2. 単元目標 ・ アフリカ州で顕在化している地球的課題は、それが見られる地域の地域的特色の影響を受けて、現れ方が異なることを理解できる。 ・ アフリカ州に暮らす人々の生活を基に、各州の地域的特色を大観し理解できる。 ・ アフリカ州において、地域で見られる地球的課題の要因や影響を、州という地域の広がりや地域内の結び付きなどに着目させて、それらの地域的特色と関連付けて多面的・多角的に考察、表現できる。 ・ アフリカ州について、よりよい社会の実現を視野にそこで見られる課題を主体的に追究できる。 関連する学習指導要領上の目標 本単元は、中学校学習指導要領 社会科の下記の内容を受けて指導に当たる。 (1) 世界の諸地域 次の①から⑥までの各州を取り上げ、空間的相互依存作用や地域などに着目して、主題を設けて課題を追究したり解決したりする活動を通して、以下のア及びイの事項を身に付けることができるよう指導する。 ① アジア ② ヨーロッパ ③ アフリカ ④ 北アメリカ ⑤ 南アメリカ ⑥ オセアニア ア 次のような知識を身に付けること。 (ア) 世界各地で顕在化している地球的課題は、それが見られる地域の地域的特色の影響を受けて、現れ方が異なることを理解すること。 イ 次のような思考力、判断力、表現力等を身に付けること。 (イ) ①から⑥までの世界の各州において、地域で見られる地球的課題の要因や影響を、州という地域の広がりや地域内の結び付きなどに着目して、それらの地域的特色と関連付けて多面的・多角的に考察し、表現すること。		
3. 単元の評価規準	①知識及び技能	・ アフリカ州で顕在化している地球的課題は、それが見られる地域の地域的特色の影響を受けて、現れ方が異なることを理解している。 ・ アフリカ州に暮らす人々の生活を基に、州の地域的特色を大観し理解している。
	②思考力、判断力、表現力等	・ アフリカ州について、設定した視点から、なぜ国際支援が必要なのかを多面的・多角的に考察している。
	③主体的に学習に取り組む態度	・ アフリカ州について、よりよい社会の実現を視野にそこで見られる課題を主体的に追究しようとしている。

4. 単元設定の理由・単元の意義
(児童/生徒観、教材観、指導観)

【単元設定の理由】

本単元は、中学校学習指導要領 社会科の地理的分野（１）③の内容を受けて設定した。

【単元の意義】

本単元においては、今後学習する「日本の様々な地域」で、我が国との比較や関連を図ることで我が国と国土に対する認識を深めることができる。また、各州で起こっている地球的課題の要因や影響を考えることで持続可能な社会づくりを考える姿勢の育成にもつながると考えられる。

【生徒観】

生徒はこれまでに題材「アジア州」で「急速に都市が発展した理由」、題材「ヨーロッパ州」では「地域統合と孤立主義はどちらが得か」という単元を貫く問いを設定して、地球的課題の要因や影響について学習している。これらの学習を通して、問いに対してさまざまな視点や立場から調査し、資料にまとめたり、議論したりする活動を行い、多面的・多角的に考え表現することができるようになってきている。

本単元においては、視点に別れた調査を行う過程で、アプリ選択と思考ツールを含むまとめ方の決定、結論を導くための証拠となるデータの見つけ方などでつまずきが予想される。

【教材観】

アフリカ州は、人類が誕生した地であり古代にはエジプト文明が栄えるなど長い歴史をもっている。16世紀に始まったヨーロッパ人との交易では金や象牙が注目され、その後、1000万人ともいわれる人々が奴隷としてアメリカ大陸に送られた。19世紀末までにはその大部分がヨーロッパ諸国の植民地となり、多くの国が独立を達成する1950年代まで支配が続いた。さらに独立後も民族と国境が一致しないことなどを理由とした内戦や紛争が続くなど苦難の歴史が続いた。

現在のアフリカ各国でさまざまな地球的課題が顕在化した背景には、これらの歴史の他に、豊富な鉱産資源やプランテーション農業がありながらも、工業化の遅れによってモノカルチャー経済から脱することができないこと、乾燥した地域が多いという気候などの「地域的特色」が関係している。

本教材は、これらの「地域的特色」を捉えながらアフリカに国際的な支援が必要な理由を考え、日本人としてどんな支援を行えるかについて考えさせる。それによって、最終的には我が国と国土に対する認識を深め、持続可能な社会づくりを考える姿勢に繋げることができる教材である。

【指導観】

単元を貫く問い

なぜ、アフリカ州に
国際的な支援が必要なのか？

どんな視点で考えられる？

国際的な支援が必要な原因は何？



これまでの社会科の授業においては、「主体的な学び」を実現するため、予想と結果、既習と未修、理想と現実のズレ等の「思考のズレ」によって生徒の問いを顕在化させ、その問いを整理し共有した上で学習課題や単元を貫く問い（左図）を設定してきた。また、視点や立場を明確に指定して調査し、資料にまとめたり、議論したりすることで、多面的・多角的に考え表現する活動につながると考えている。

図1「単元を貫く問いと視点」

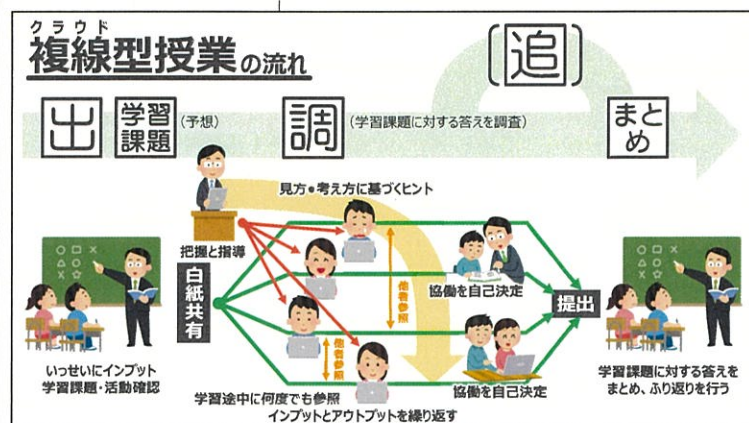


図2「複線型の授業のイメージ」

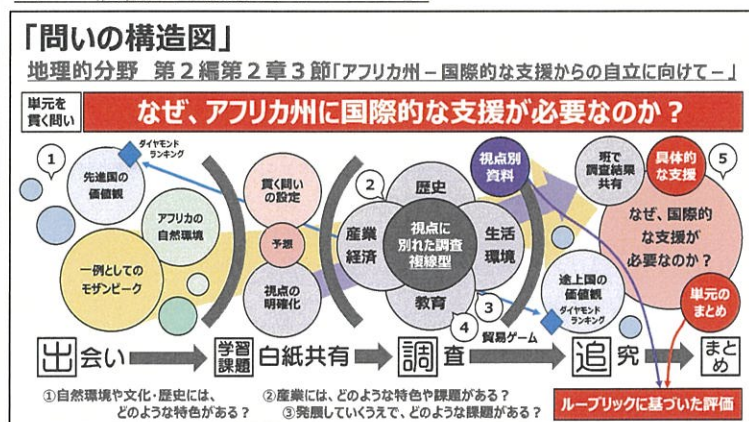


図3「本単元の問いの構造図と4つの視点」

第二次は、授業の初めに必要な知識をいっせいにインプットした後、各自が割り振られた視点でアフリカ州に国際的な支援が必要な理由を資料にまとめる。調査においては、まずは教科書やノートをベースとするほか、教師海外研修での経験をまとめた「モザンビーク道中」、モザンビークで撮影した動画やNHK for Schoolの動画など、それぞれが多様な方法で調査を行う。

その際にはアプリ選択と思考ツールを含むまとめ方の決定、結論を導くための証拠となるデータの見つけ方などでつまづきが予想されるため、ICTによる視覚を含めた指示や机間指導などの手立てを講じたい。第二次の最後には「貿易ゲーム」を行い、開発途上国と先進工業国で経済格差が拡大していく仕組みを現実の自由貿易システムと対比しつつ体験的、共感的に理解させたい。

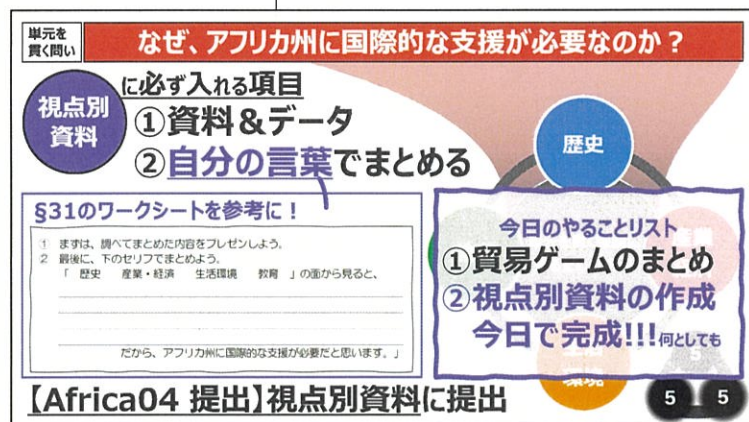


図4「第二次の最後に生徒に提示したスライド」

単元によっては、授業冒頭に知識のインプットを行い、その後は各自が課題解決に向けて調査を行う「複線型授業（左図）」を取り入れてきた。調査では一人一台端末を積極的に利用し、自分で使いやすいアプリを選択したり、まとめ方を自己決定したりする「白紙共有」、さらには友人や教師との「協働」も自己決定させることで個別最適化が図られ、主体的・対話的で深い学びにつながると考えている。

本単元の指導に当たっては、まず、第一次であらましを捉えさせ、アフリカ州との出会いを演出する。

さらに教師海外研修と JICA（独立行政法人国際協力機構）、そして 1954 年からこれまでに日本が投じてきた約 70 兆円近い ODA（政府開発援助）資金についての資料を提示する中で、「なぜ、アフリカ州に国際的な支援が必要なのか？」という単元を貫く問いが設定される。次に解決のために必要な 4 つの視点（左図）を設定し、4 人班で一人 1 視点になるように割り振る。

本単元においては、生徒の思考の文脈を意識した資料提示と発問を行い、それによって生まれた「思考のズレ」を最大限に活かして単元を貫く問いや学習課題を設定する。

第三次は、班の中で調査結果を共有する場面から授業が始まり、「アフリカ州には、どんな支援が必要なのか」という学習課題を設定する。最後には「日本人として具体的に何ができるか」を主体的に考えられるよう指導に当たる。

5. 単元計画（全5時間）				
流れ	時	『小単元名』 学習のねらい	学習活動	資料など
一次 （導入）	1	『あらまし』 ・ アフリカ州の自然について、雨温図、分布図、写真などの資料から概観し、基礎的・基本的な知識を身に付ける。 ・ アフリカ州の地域的特色を理解するために、「なぜ、アフリカ州に国際的な支援が必要なのか。」という単元を貫く問いを立て、見通しをもって主体的に追究する。	（先進国の価値観） アフリカの自然環境と歴史	
		【単元を貫く問いの設定】 なぜ、アフリカ州に国際的な支援が必要なのか。 —予想→ 単元を貫く問いに迫るための視点 「歴史」「産業・経済」「生活環境」「教育」		
二次 （展開）	2	『産業・経済』 アフリカ州の産業について、さまざまな資料から概観し、基礎的・基本的な知識を身に付ける。アフリカ州について、設定した視点から、なぜ国際支援が必要なのかを多面的・多角的に考察する。	農業や工業の特色 モノカルチャー経済 視点に分かれた調査活動	・「モザンビーク道中」 ※自作教材 ・NHK for School
	3	『発展に向けた課題』 アフリカ州の発展に向けた課題を生活環境や教育の面から概観し、基礎的・基本的な知識を身に付ける。アフリカ州について、設定した視点から、なぜ国際支援が必要なのかを多面的・多角的に考察する。	生活環境と教育 視点に分かれた調査活動	・「モザンビーク道中」 ※自作教材 ・NHK for School
	4	『貿易ゲーム』 格差が拡大していく仕組みについて、体験を通して多面的・多角的に考察する。アフリカ州について、設定した視点から、なぜ国際支援が必要なのかを多面的・多角的に考察する。	経済格差が拡大していく仕組み 視点に分かれた調査活動	・「モザンビーク道中」 ※自作教材 ・NHK for School
三次 （終末）	5 本時	『具体的に何ができる？』 具体的な支援策について、先進国と途上国の価値観のギャップに気づき、多面的・多角的に考察する。 アフリカ州の学習内容を振り返って、よりよい社会の実現を視野に、国際協力への理解を深める。	班内で調査結果を共有 具体的な支援策 （途上国の価値観） まとめの活動	

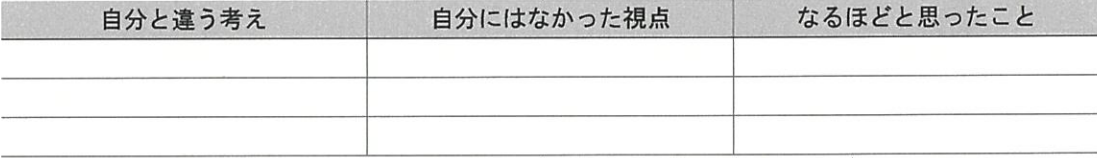
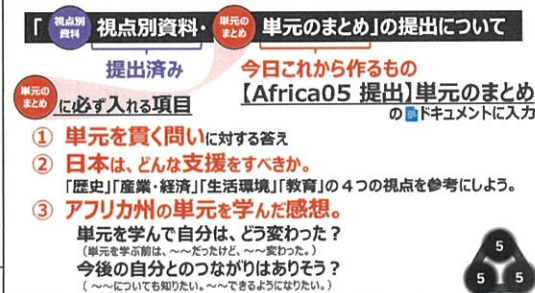
6. 本時の展開（5 時間目）

【本時のねらい】

「アフリカ州に国際的な支援が必要な理由」を理解し、

「具体的な支援策」について多面的・多角的に考察することを通して、

主体的に探究課題を追及し、社会に関わろうとすることができる。

過程・時間	教員の働きかけ・発問および学習活動・指導形態	指導上の留意点（支援）	資料（教材）
導入 (15 分)	(1) 出会い 前時までに作成してきた視点別資料を使って、班内で調査結果を共有する。 (2) 単元を貫く課題に対する答えを出す 「国際的な支援が必要な理由を書こう」 (3) 問いの顕在化 「単元のはじめに考えたダイヤモンドランキングを思い出そう。」 (4) 学習課題の設定	進め方をモニタで示す 	パワーポイント
展開 (20 分)	(5) 個人思考 「日本はどのような支援をすべきか？」 ・アフリカ州に日本がすべき支援を考え、ワークシートに書き込む。 (6) 集団思考 ・個人思考の結果を班内で発表しあい、全体で共有する。 ・ワークシートに載せた下表にメモを取りながら行う。	意見の書き方を示す 【意見の書き方】 なぜなら、□□だからです。 そして、～を〇〇すれば、 ◇◇になると思うからです。 結論 → 理由 → 裏付け → 留保事項 ～だと思います なぜなら～だから ～すれば～になる ただし～	
	(7) 途上国の価値観 「当事者にとっての優先順位は？」 ・途上国の生の声を聞く。 「なぜ、私たちの優先順位と違うの？」 ・先進国の価値観だけで支援を行うとミスマッチが起こる可能性や信頼関係の構築に繋がらないことに気づく。		・映像資料 (現地の先生や大学生の意見)
まとめ (15 分)	(8) 単元のまとめ ・一人一台端末を使って、各自で単元のまとめを行う。	進め方をモニタで示す	パワーポイント 

7. 本時の振り返り

本時の授業にあたって、以下の2点を指導案から変更して実施した。

1つ目は、「導入（1）出会い」である。前時までに作成してきた視点別資料を使って、班内で調査結果を共有する場面であったが、当初は班内での共有だけの予定であった。しかし、班によって視点別資料の完成度にばらつきがあったため、班での共有後に各視点の代表者1名ずつを指名して、学級全体で共有を行った。これによって、単元を貫く問いであった「国際的な支援が必要な理由」を説明する材料が確実に揃い、その後の具体的な支援策を考える活動が円滑に進んだ。

2つ目は、「展開（7）途上国の価値観」である。単元の1時間目『あらまし』では、班ごとに右図のように国の発展に必要な事の優先順位をダイヤモンドランキングで考えた。当初は、単元のまとめにあたって現地の先生や大学生が考えた同じダイヤモンドランキングを見ることで、「民主主義や環境問題に重きを置きがちな先進国としての日本」と「政治や経済の安定、人権・医療や教育などの切実な問題を抱える途上国としてのモザンビーク」という価値観の違いを実感させる予定であった。

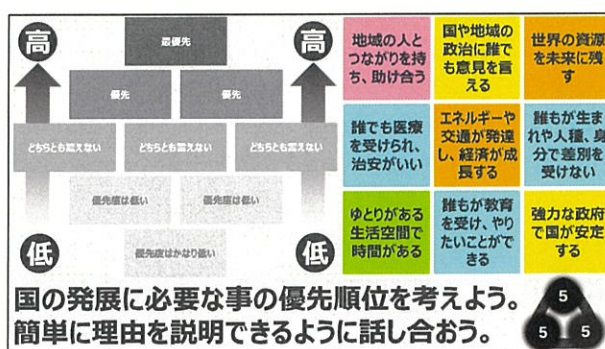


図5「発展の優先順位を考えるダイヤモンドランキング」

しかし、歴史的分野の学習が進んでいない中学1年生という発達段階もあってか、はじめに行ったダイヤモンドランキングの時点で、そもそも大きな価値観の差が発生しないことが予想された。そこで、モザンビーク研修中に撮影した画像や映像、現地での研修を進めていく中での心情の変化などをまとめたスライドショーを作成して使用することとした。現地で撮影した画像や映像により、結果的に生徒にとって「人ごと」ではなく「自分ごと」に近づいたように思う。

8. 学習方法及び外部との連携

本単元の実践に合わせて、授業を担当する1学年（全3学級）と授業・学級担任をしている2学年（全3学級）に向け、11月30日（木）に1・2学年合同でJICA出前講座を実施した。

1学年は、本単元の学習を終えた上、さらに深める時間として実施した。2学年は開発途上国への国際協力およびキャリア教育の視点から行う、総合的な学習の時間の単元（全12時間の中の6・7時間目）として実施した。

出前講座は実施する2週間以上前から、講演内容の具体的な調整が始まり、当日は生徒の実態や学習状況にあった内容で講演を頂いた。生徒には、それまでの学習とのつながりが生まれ、実際の体験談を含めた国際協力について学ぶことができたため、たいへん貴重な機会となった。本校および市内中学校では、本格的に国際協力について授業や講演会を行っている例が少なかったため、今回の講演会を含めた実践を共有し、広げていきたいと感じた。

9. 学校内外で国際理解教育・授業実践を広める取組

今回の教師海外研修、公開授業や出前講座などの知見を市内の中学校社会科教育研究会などで共有するなど、さまざまな方法で広げていきたい。

具体的には、作成した指導案やプレゼンテーション資料・映像等を八戸市が整備している授業クラウド（Googleが提供する指導と学習を一元管理できるツールであるClassroomで作成した授業用コンテンツや資料を、市内の先生間で共有するためのシステム）を活用し、広く市内小中学校に向け公開したい。これにより、本校以外の学校でも、これらのコンテンツを再利用することができるため、広く波及効果があると考えている。また、今後はDXを活用して学校現場でも行うことができる国際理解や国際協力についても研究を進めていきたいと考えております。

【自己評価】

10. 成果	第一次、単元のはじめに、教師海外研修と JICA（独立行政法人国際協力機構）、そして 1954 年からこれまでに日本が投じてきた約 70 兆円近い ODA（政府開発援助）資金についての資料を確認したところ、生徒の反応は「何にお金を使っているのか」「物価高や増税の中で、国内にお金を使うべき」「国内にも困っている人はいる」などの反応が出た。その上で、「なぜ、アフリカ州に国際的な支援が必要なのか？」という単元を貫く問いを設定して、4 つの視点に割り振り、複線型で調査を行った。 複線型の授業を取り入れたことで、視点を明確にした主体的な調査が可能になり（13. 学びの軌跡の①へ）、アフリカ州に国際的な支援が必要な理由について、「現在起こっている飢餓や紛争などの現象」以上に「その背景となっている原因」まで深めることができた。 また、それによって本時で行った「日本はどのような支援をすべきか？」という課題追究への深まりが生まれた。（13. 学びの軌跡の②へ）結果的に第一次、単元のはじめに生まれた約 70 兆円近い ODA に対する疑問や問いが生徒自身の中で解消されたように思う。 やることリスト ① 4 人班をつくり、4 つの視点を割り振る。 ② 割り振られた視点で、アフリカ州に国際的な支援が必要な理由を資料にまとめる。 今日の時間を入れて 4 時間で。5 時間目の初めには 1 分程度で他の視点の人に説明ができるように！ ～ 使いやすさでファイル形式を選択しよう ～ ドキュメント 文書の作成 スプレッドシート 表の作成・計算 スライド プレゼンテーション ジャムボード 情報の整理・分析 ～ こんなときは、先生・友達と協力しよう～ <table><tr><th>初めの段階</th><th>途中</th><th>終わりの段階</th></tr><tr><td>☐ 何をすればいいかわからない ☐ ファイル形式で悩んでいる</td><td>☐ 今やっている方向性でいいか ☐ わからない語句がある</td><td>☐ 何かプラスできないか ☐ 困っている人はいるか</td></tr></table> 図 6「複線型の調査の際に提示したスライド」	初めの段階	途中	終わりの段階	☐ 何をすればいいかわからない ☐ ファイル形式で悩んでいる	☐ 今やっている方向性でいいか ☐ わからない語句がある	☐ 何かプラスできないか ☐ 困っている人はいるか
初めの段階	途中	終わりの段階					
☐ 何をすればいいかわからない ☐ ファイル形式で悩んでいる	☐ 今やっている方向性でいいか ☐ わからない語句がある	☐ 何かプラスできないか ☐ 困っている人はいるか					
11. 課題	① ダイヤモンドランキング 7. 本時の振り返りにも書いた通り、単元のはじめに行った国の発展に必要な事の優先順位を考えるダイヤモンドランキングは、生徒のレディネスや発達段階に応じて予想される反応とは別のものが帰ってくることがわかった。 図 7・8「生徒が実際に並べた国の発展に必要な事の優先順位」 ② 複線型の調査 第二次で行った複線型の調査では、少数ではあったが事前の予想通り、アプリ選択と思考ツールを含むまとめ方の決定、結論を導くための証拠となるデータの見つけ方などでつまずく生徒が発生した。						
12. 改善点	① ダイヤモンドランキング レディネスや発達段階に応じた指導が大切であると感じた。同様の活動は、公民的分野の学習などで活用できるため、生徒の発達段階に応じて、活用していきたい。 ② 複線型の調査 第二次で行った複線型の調査においては、これまでも同様の調査を行う単元があったため、生徒も作業に慣れていた。しかし事前の予想通り、少数で						

はあったがアプリ選択と思考ツールを含むまとめ方の決定、結論を導くための証拠となるデータの見つけ方などでつまずく生徒が発生した。

また資料の読み取りの際に、主観が入り込んだり、根拠の乏しい状態で結論をまとめたりするなど、「事実からの乖離」や「資料読み取りのスキル育成の重要性」を感じる場面もあった。

そこで、「根拠となる資料とそれからわかること」、「自分の視点から見た国際的な支援が必要な理由」をシンプルにまとめることができる画像データを Google Classroom 上で配布するなど、下位の生徒でも取り組めるような手立てを講じた。

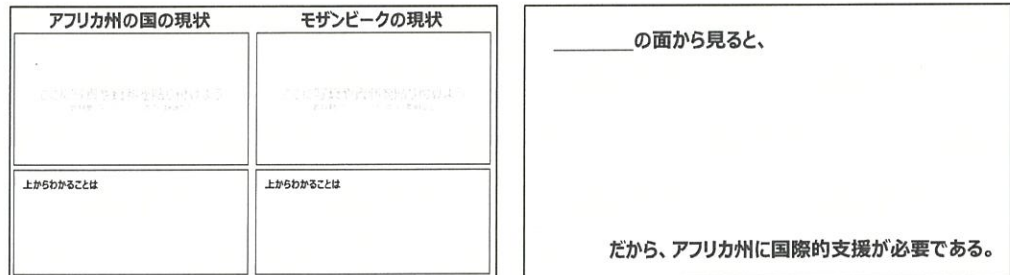


図 9・10 「Google Classroom 上で配布した画像データ」

「事実からの乖離」を防止するため、教科書やノートで学習した知識を最大限活用することを繰り返し指導した。

その上で「資料読み取りのスキル」育成のため、インターネットで調べ学習をする際に注意すべきポイントをまとめて提示するなどの手立てを講じた。

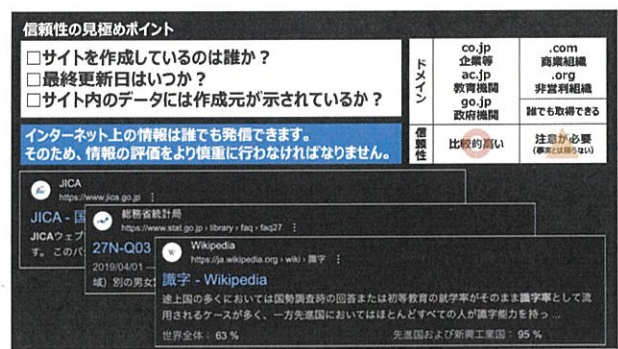
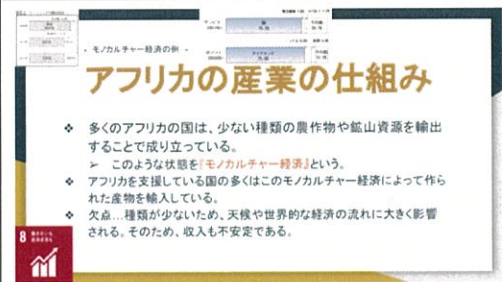
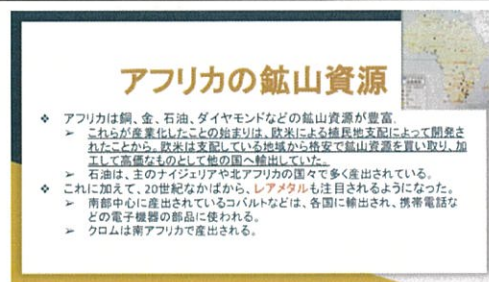
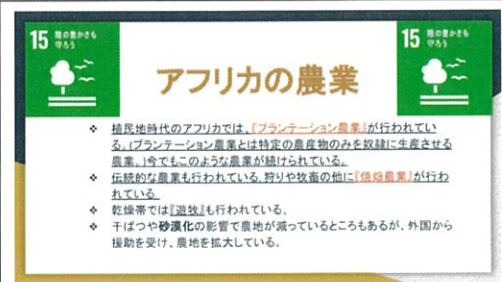


図 11 「インターネットで調べる際の注意点」

13. 学びの軌跡 (児童生徒の反応・変化、感想文、作文、ノートなど)

① 視点を明確にした主体的な調査 生徒の作成物 1【産業経済】



モザンビークから見るアフリカ州の『産業・経済』

❖ 路上で野菜などを売っている。

- 加工方法等を知らない。
- 加工する技術を持っていない。
- 販売による儲け方がわからない。
- 質が悪く、海外で儲けることができない。

❖ このことから、モザンビークでは生産する事ができてそれらを使って経済をうまく回すことができない

マプト市内の様子…

モザンビークの市場…

・ゴミを運ぶ人

貿易ゲームから見るアフリカ州の『産業・経済』

❖ 貧しい、品質が悪いというだけでアフリカの国は差別され、豊かになれない。

❖ 技術を持っていない国には協力することが大切。

❖ 貧しい国も豊かな国も差別がなくなると良い。

1 産業 (10%) 2 貿易 (10%) 3 技術 (10%) 4 収入 (10%) 5 技術 (10%) 6 収入 (10%)

産業、経済の面から見ると、

7 収入 (10%) 8 収入 (10%) 9 収入 (10%) 10 収入 (10%) 11 収入 (10%) 12 収入 (10%)

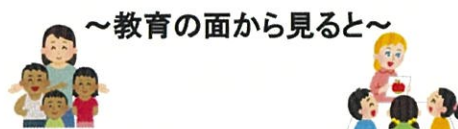
技術を持っていないことがわかる。

だから、アフリカには国際的な支援が必要である。

13 収入 (10%) 14 収入 (10%) 15 収入 (10%) 16 収入 (10%) 17 収入 (10%)

生徒の作成物 2【教育】

なぜアフリカ州に国際的支援が必要なのか



～教育の面から見ると～

モザンビークの教育状況

学齢期（小学校）の子どもの数	720万人
小学校の修了率	45%
小学校に通っていない子どもの数	120万人
子どもと教員の割合（小学校）	子ども60人あたり教員1人

- 小学校の修了率が半分以上
- 学齢期の子供が720万人もいるが120万人もの子供が通えていないなど…

モザンビークの授業

- 小学3年生が4けた同士の計算をしている
- ⇒しかし右下の男の子は計算のしかたがわからない
- ⇒テストも合格できない



モザンビークの先生

- 理科の実験を言葉だけで習っていた
- ⇒生徒に実験を見せる事ができない
- JICA隊員による研修を受けている



教育の面から見ると、

- 先生は少なく、勉強をしっかりと教えられる環境ではない
- 十分に教育を受けられる環境ではないため、小学校を修了できる人が少ない
- 学校に通えない子もたくさんいる



だからアフリカ州に国際的支援が必要！



②「日本はどのような支援をすべきか？」という課題追究への深まり 生徒の単元のまとめ

※Google ドキュメントで作成・提出された文章をそのまま掲載しています。

① 単元を貫く問いに対する答え

アフリカ州に国際的な支援が必要な理由は、教育面では学校に通う子供がしっかりと教育を受けられないや、生活環境面では他国との格差がありその格差を取り戻すために必要だったり、産業経済面では鉱山資源だよ

りのモノカルチャー経済を普通の経済に戻すために支援が必要だったりとかくさんの理由があります。

② 日本は、どんな支援をすべきか。

教育を中心的に支援すべき。なぜなら、未来につながるから。教育をうまく受ければ今の子供が大人になって未来につながる技術を持ち技術力が高まる可能性があるから。

③ アフリカ州の単元を学んだ感想。

僕は、今までアフリカもアメリカやヨーロッパと同じく発展していると思っていました。

しかし、今のアフリカ州のことを調べて、アフリカ州はまだ発展途上国ということや、生活環境や教育、産業経済などに支援が必要なほど発展が遅れているということがわかりました。今、僕にできることはアフリカ州のことをたくさん知ることです。そして、知った上でどんな支援をするべきなのか、どこに支援するべきなのかをもっと知っていきたいです。

① 単元を貫く問いに対する答え

アフリカ州に国際的な支援が必要な理由は、植民地時代からのカカオ、綿花、茶、コーヒー豆などの特有のものしか輸出しておらずモノカルチャー経済になっており、モザンビークの人は日本円で月に約5000円しか稼げない。また、人口が増加して食糧不足や医療不足で多くの人がなくなっていたり、スラムでは停電や断水が日常的に起こっていたり、SDGs 4の教育の質の良い教育ができていなかったり、教育がうまくいかないから科学技術が発展しないことなどがあるのでアメリカ州に国際的な支援が必要である。

② 日本は、どんな支援をすべきか。

- ・輸出品を偏らないように、日本が持っている栽培の技術を教える。
- ・沢山の人が死亡しないために、不足している医療のワクチンや薬の輸出・食料の支援をする。また、道路や水、電気などのインフラ整備が整っていないため日本が持っている水道 水の技術や、電気、道路をつくる技術を共有する。

③ アフリカ州の単元を学んだ感想。

アフリカ＝汚いとか、行きたくないと思っていたけど、奴隷貿易や発展途上国ということを知って、私は差別するようなことを思っていたんだなと思いました。教育面では、先生すら、正しい教育を受けていなくて子どもたちにもあまり良くない教育をしてしまったり、貧困な人がたくさんいたり、とても苦しい環境なんだなと思いました。植民地だったけど、他の国から助けてもらって生活を豊かにしようと頑張っていたり、教育を受けれると嬉しいと思っているのは、日本では「当たり前」と思っていたから、植民地時代があってもそう思えるのは感心しました。もっと、植民地時代や貿易奴隷のことを知りたいです。

① 単元を貫く問いに対する答え

アフリカ州に国際的な支援が必要な理由は生活環境が十分に整っておらず、人口増加の影響により飢餓で亡くなったり、栄養不足、食料不足にもなっているから。

② 日本は、どんな支援をすべきか。

質の高い教育を受けさせたり、食料不足に悩んでいる地域も多数あるのでできる限りのことは支援して自立していくことも教える

③ アフリカ州の単元を学んだ感想。

はじめは自分の住んでいる国からは程遠い場所でなんとなく貧しい人達が多く、誰かが助けてあげなければいけないような状況なのは理解してい

	ましたが、自分には全く関係のない話だと思っていました。今回の授業を受けてもきっと今まで持っていた考えは変わらないとも思っていました。 ですが授業で友達の意見や先生の話、家でテレビで見たりインターネットで調べてみたりして遠い場所で起こっていることでも自分の生活や日頃から気をつけていれば少しでもその人達のためになったり、そこだけの問題ではなく地球全体の問題なのがよくわかりました。 この現状を知って私は将来 JICA のような開発途上国へ支援や国際協力をして今もどこかで助けを待っている人達のために動ける人になりたいです。 ① 単元を貫く問いに対する答え アフリカ州に国際的な支援が必要な理由は植民地支配されたり、紛争・内戦が起こった歴史から産業や経済、教育などの発展が遅れ、他の国との差が開いている。その格差をなくし、他国と同じ土俵に立つために、国際的な支援が必要だ。 ② 日本は、どんな支援をすべきか。 日本は、教育的な支援をすべきだと思います。なぜなら、現在教育が平等に届いていないからです。全員に高い水準の教育が与えられれば、産業・経済・貿易、技術や農業など色々な分野が発展していき、国全体が大きく発展すると考えたからです。 ③ アフリカ州の単元を学んだ感想。 僕はアフリカ州の勉強をしてみて、植民地支配はする方にとっては得しかないが、される方にとっては労働力の減少、発展が遅れる、宗教や文化などの影響、独立しても紛争や内戦が起こるなど、国としての誇りと発展を失うことだと知りました。アフリカが全体的に発展が遅れている理由は植民地支配されたことがどの面でも大きいと思うので、これから先進国が支援をし、金濱さんのお話にもあった『上から下に支援するのではなく、横並びにする』事が必要だと思いました。また、貿易ゲームなどでは、アフリカのように資源を持っても工場や技術がないと高くは売れず、日本はそう考えると資源がない分資源を輸入して加工して輸出することしか出来ないですが、それで利益を出しているという事もわかりました。アフリカ州の学習を通して、アフリカだけではなく世界全体の仕組みも少しですが分かった気がして、これからは家でニュースや番組を見るときも、頭の中でこの学習と関連付けて考えたいです。
14. 授業者による自由記述	今回、授業を終えて一番思うことは、私自身がアフリカやモザンビーク、そして開発途上国や国際協力について「自分ごと」と思うようになったことです。それによって、授業で生徒に伝える言葉の温度差も変わり、さらに私が現地に行って体験したことを話したり、画像や映像を見せたりしたことで、生徒にとってもより「自分ごと」に近づいたように思います。「百聞は一見にしかず」ということを改めて実感しました。 また、今回は一人一台端末をフル活用して調査する「複線型の授業」を単元構成の中心に据えて行いました。社会の急速な変化によって、ここ数年で学び方も大きく変わってきましたが、今回の授業実践を終えて教師自身も学び続ける必要性を再認識しました。 今回の研修は、JICA 東北、JICA モザンビーク事務所をはじめ、事前・事後研修の講師の先生方など多くの人に支えられて成り立ったものだと強く感じています。本当にありがとうございました。

参考資料：

- ・高橋純(2022). 「学び続ける力と問題解決～シンキング・レンズ, シンキング・サイクル, そして探求へ～」
株式会社東洋館出版社
- ・「新・貿易ゲーム 経済のグローバル化を考える」(2021).
特定非営利活動法人 開発教育協会

出典：

- ・「豊かさの開発」(2016). 特定非営利活動法人 開発教育協会
「何のための開発？」ダイヤモンドランキング